

序 文

わたしはまず、「レギュラシオン理論」の新しい展開を日本の読者に提供したいという、大村書店の大変光榮な企画に感謝するものである。

フランスの経済学者の一グループがレギュラシオン・アプローチからここ一五年の間に展開してきた問題設定や概念が、主としてフォーディズムと呼ばれる戦後の発展モデルとその危機の解明をめざしたものであったことは確かである。しかしながら、わたしがこれまでつねに確信してきたことだが、ふたつないし複数の要素のあいだに矛盾や闘争が存在し、しかもこれらの要素がひとつの同じ構造のなかで一体となって存在するようになるや否や、まさにその瞬間からレギュラシオン・アプローチを、その主要な概念装置である、大危機と小危機、体制レジーム、調整諸形態、制度化された妥協、等々とともに利用することができる。この意味でレギュラシオン・アプローチは、社会諸科学の全体、とりわけ、国際関係論や政治学などの分野に取り組むための方法になりうるのである。しかもレギュラシオン・アプローチは、自然科学の方法の一部と合致している。それゆえこのアプローチが、とりわけ自然科学と社会科学のちようつがいとなるような科学の探求にふさわしく見えるとしても、それは当然なのである。そのような科学とは、人類のエコロジー、つまり政治的エコ

ロジーである。政治的エコロジーはたんに学問の一分野なのではない。それはまた哲学であり、世界でますます重要なものになっている社会運動のプログラムでもある。政治活動に携わるエコロジストの集まりでもある「緑の党」は、自分たちのプログラムの基礎を経済学批判におきつつ、二〇世紀における解放の希望を担った人びと、すなわち、コミュニストやソシヤリストの、二一世紀におけるしかるべき継承者である。一九九二年三月のフランス地方選挙でエコロジストは一四%の平均投票率を確保し、フランスでもっとも古い工業地帯であるノール・パド・カレ地域議会の議長ポストを獲得した。しかも就任したのは女性のエコロジストである。つまり、フランス地域議会の最初の女性議長は緑の党から生まれたのである。彼女は議長就任にさいし、社会党と共産党の支持を得た！

この本に集められた論文は、経済学者としてのわたしの仕事と緑の党の活動家としてのわたしの仕事をつなぐような位置にある。したがってここでは、レギュラシオン・アプローチの方法が、わたしの研究成果と「環境問題」にたいするわたしの取組の政治的意見の背後に隠れて、しばしば見えなくなっている。とはいえ、これまでのレギュラシオン理論の邦訳書によってレギュラシオニストの厳密に経済学的な著作に慣れ親しんだ日本の読者が、どれほどこれらの経済学研究が政治的解放の目標によってしばしば導かれていたか判断できる点で、本書は有益であろう。

しかしながらより詳しく言えば、フランスのレギュラシオニストのすべてがエコロジストではない。それどころか、レギュラシオニストの中には環境危機の問題にあまり関心を示さないひと多いのである！ 彼らの多くはもはや、レギュラシオンの問題がそこから生じるところの、緊張や社

会的矛盾の激化さえ強調しようとしなくなっている。今日では、われわれの初期の著作のマルクス主義的系譜は注意ぶかく被い隠されている。レギュラシオニストの現在の主要傾向は、支配的イデオロギーにできるだけ受け入れられるような用語で自分たちの研究を表現することである。レギュラシオニストはノーベル経済学賞を受賞したハーバード・サイモンの威信で身を守ろうとしているので、社会的矛盾のレギュラシオンの問題を、個別的諸行動が制度化される調節の問題として展開する傾向が次第に強くなっている。それは今日「合意の理論コンセンサス・セオリー」と呼ばれる研究プログラムである。わたしはこの研究プログラムを尊重しているが、それはわたしの研究プログラムとは別物である。それに反して、この本の論文は利害の衝突や社会的緊張を強調するものである。社会的緊張はしばしば制度化された妥協や「合意」によって解決されるが、しかしまたそれはしばしば危機ないし戦争によって解決されるのである。

地球環境危機の問題はきわめて重要である。一九九二年六月にブラジルのリオで開かれる国連環境開発会議（地球サミット）は、人間の経済活動と生物圏の安定の必要性との矛盾を調整する過程においてひとつの画期を印すものである。問題になっているのは、かの「宇宙の驚異」（ソポクレース）である人間たちのあいだで、重要な性格をもつ社会的妥協に到達すること以外のなにものでもない。しかし、社会的妥協に到達するということは今日、現在の人間と未来の世代との、北と南との、人類と自然との妥協を意味するのである！適切なレギュラシオン様式が制度化されるならば、そのときには世界経済は「持続可能な」、すなわち、社会的に公正で世代から世代へと再生産可能な発展体制に向かって進むことができるだろう。さもなければ、人類はこれから半世紀、深刻な環境

危機を体験することになるだろう。例えば、大気の温暖化による異常気象は、何億という人びとの移動を引き起こすだろうし、生物多様性の損傷は工業文明の基盤を著しく弱めるだろう。それにもかかわらず、人類共通の利害が分別のある「合意」によって表現されるとはかぎらないのである。環境戦争も十分ありうる。この点の帰趨にかんして、社会的規範の変容や種々の社会運動の進展は決定的に重要であろう。しかし湾岸戦争は、「新世界秩序」の名において世論を操作することがいかに容易であるかを如実に示したのである。わたしが願うのは、自然および労働者にとってもっとも「持続可能」でありうるような新世界秩序であるが、このような新世界秩序を作っていくうえで、日本は大きな役割を果たす可能性をもっている。日本はフォード主義的發展モデルの危機を乗り越えるその能力によって、世界の人びとを驚嘆させた。日本の大企業は、人間資源や労働者の知能や創意の動員の欠如といった、フォードイズムの根本的な欠陥のいくつかを乗り越えたように見える。「トヨタイズム」は大企業の枠の中ではあるが、このような動員を実現したのである。

一九九〇年の秋に日本に滞在した際に、わたしは日本の進歩的知識人が日本のこの成功をなかなか認めようとしないうにびびりさせられた。彼らのためらいは確かに理解しうるものである。というのは、トヨタイズムはこの革命をまだ半分しか達成していないからである。例えば、中小企業の労働者や女性はそこから完全に排除されているのである。とりわけ、労働者の多能工化にもとづいて企業内の作業を「時間の分かち合い原理」(B・コリア)によって遂行する点で成功を収めているにしても、日本の諸個人は自分たちの生活の他の諸側面にたいする権限を掌握しているのとはまったく異なるのである。その理由は明らかである。日本の労使妥協はただ単に彼らの生活の他の側

面を無視してしまっているのだ。日本の労使妥協は労働者に家族生活のための時間さえあたえていない。日本の労働者の生産性はきわめて高いにもかかわらず、彼らには市民として生きる時間さえあたえられていない。人間の全生活を生産的労働に動員することによって、日本企業は明らかに競争上の強みを保証されている。しかし、環境にたいする緊張、「日本人並みに労働する」ように強制されたくない他の諸国との緊張などが引き起こされているのである。

だから世界のんびりとは、日本が二一〇〇時間以上の年間労働時間を一八〇〇時間にしようとするのを知って、胸をなでおろしている。フランスでは、人びとはすでに一七〇〇時間以下しか働いていない。ドイツの人びとの労働時間は一六〇〇時間以下である！ それなのに、ドイツの競争力はきわめて強いのである……。

いずれにせよわたしの考えでは、リオの地球サミットと環境問題にたいする危機意識の高揚を通じて、「非物質的な」成長モデル、すなわち、自由時間の増大を重視するモデルを選択する工業国が次第に多くなってゆくと思われる。この本が日本モデルのこのような方向への改革を支持する日本の男女に議論を提起するきっかけになるならば、わたしとしてはこれにまさる喜びはない。最後になったが、わたしの親しい友人であり、この本の編訳者である井上泰夫と若森章孝の両氏に心から感謝するものである。ふたりの献身的な協力がなかったならば「エコロジーと資本主義の将来」を論じる本書がこのような形で日本の読者の前に現れることはなかったであらう。

一九九二年四月

アラン・リビエツ

〈インタビュー〉

「緑」の経済学者リビエッツの足跡

〈聞き手〉ソフィ・ゲラルディー

アラン・リビエッツは心優しく夢を語る人であるにしても、その活動ぶりは夢想家にたいする世間の常識を完全に超えている。緑の党の経済問題の専門家の人であるから、彼がエコロジーについて語るのは当然だ。けれども、エコロジストとしての彼の活動は、本業から脇道にそれたような類のものではない。国立理工科学校と国立土木学校を卒業した数理経済学者である以上、彼はフランスのエリートコースを歩んだ人たちであれば当然期待できそうな尊敬を受けて然るべきだろう。だが尊大ぶったエリートとして取り扱われるとき、この人の青い眼は険しくなり、口もとが閉じてしまう。これは、地方選挙のキャンペーン期間を通して、彼が連日実感していることである。だがそんなことは百も承知のうえで、彼は自分の政党を、すなわち、政治的エコロジーという政党を選んだのである。彼は自分の国では予言者ではないにしても、自分の著作が世界中で翻訳されていて、自分の土地理論から示唆を得た土地改革が（例えばブラジルのサンパウロ市当局によって）実施されていることで十分自分をなぐさめることができるだろう。

今年四五歳になるリビエッツの経歴をたどるならば、彼が勉強を終えたのち、若くして関心を寄せたのは、地方経済についてであった。それは、政治的関心からであると同時に、職業的関心から

であった。一九六八年の五月革命世代の一人として活動したのち、彼は統一社会党（PSU）で「生活環境委員会」を組織した。（自分の後任がブリス・ラロンド^{*}だったと、リビエッツは愉快そうに強調するのを忘れない。リビエッツは、M・ロカールとの見解の不一致が原因で、この委員会から「追い出された」のだった）。土木エンジニアとしての彼の経歴は短期間で終わり、一九七二年以降、彼は国立科学技術（CNRS）の研究者になり、現在に至っている。

^{*}ブリス・ラロンドは、リビエッツの属する「緑の党」のライバルである「環境世代」の指導者であり、前環境相である。

「根っからの第三世界支持者であり、今なおそうである」リビエッツは、研究者としてスタートしたときから、資本主義メカニズムにたいするマルクス主義的批判を展開する。彼はあらゆる種類の搾取を説明しようとする。「都市地代」（一九七四年）では都市経済の視角から、「資本とその空間」（一九七七年）では都市経済の視角から、「奇跡と幻影」（一九八五年〔邦訳、新評論、一九八七年〕）では第三世界における工業化の経験の文脈で、搾取が分析された。彼の分析は次第に「資本主義の社会的空間」を取り扱うようになる。というのは、第三世界の地域的な風土が資本主義発展に適合するかぎりでのことであるにせよ、資本主義は場合によっては第三世界の発展をもたらすことがあるからである。例えば、アジアのいくつかの諸国の工業化は女性の低賃金労働にもとづいている。しかし、この工業化モデルをマグレブ諸国（モロッコ、アルジェリア、チュニジアの総称）に移植するのは不可能である。

リビエッツにとって今日の世界危機は、資本主義一般の危機というよりフォード・テーラー的勞

働編成の危機である。「わたしは世界危機には二つの大きな原因があると考えている。第一は、賃労働者を彼ら自身の活動の制御から排除するテラー主義原理がその効率性を枯渇させてしまったことだ。第二は、開放経済の影響だ。フォーディズムの繁栄は賃金を調整する能力にもとづいていた。三パーセントの賃金増加は自動的にほぼ同額の消費上昇によって表現された。そして消費の上昇が生産を主導した。しかし、こういった好循環がうまく進展するのは、相対的に閉鎖された経済においてだけである」。

システムのこのような危機に直面して、二種類の対応策がありうる。「一方は、賃労働者の課業を充実させることによって生産性上昇を回復させるやり方であり、他方はその反対に、従来の社会的妥協を無効にし、福祉国家等々を見直し、フレキシビリティに賭けるやり方である」。具体的に言えばドイツと日本は前者の方向に、イギリスとアメリカは後者の方向に進んでいる。「フランスでは左派と右派が共にフレキシビリティの方向を選択し、テラー主義に固執している。これが最悪の選択であったことは、貿易戦争にどの国が勝利を取っているかを見るだけで分かるというものだ」。ドイツや日本にだってテラー主義があるじゃないかと指摘すると、リビエッツは吹き出しながら、「社会科学では、本物の真理を三〇パーセント発見すれば、われわれはそれだけで納得できるんですよ！」と答えた。

人間資源を動員することが危機脱出のための秘密である。これが当てはまるのは、とりわけ地域レベルにおいてである。「フォーディズム以前のヨーロッパをたとえてみれば、それはさまざまに『産業地域』が織りなすパッチワークのようだった。各産業地域はきわめて豊かな地域的可能性と

複合的な産業ネットワークとをもっていた。例えば、バーデ・ビュンテンベルクのような地域や北イタリアの多くの地域（エミリア・ロマーニャ、ブリアンツァ、ベニス）は、全力を尽くして地域産業ネットワークの基盤を発達させてきた。大企業と中小企業との『地域』を基盤とする協力関係、企業と賃労働者との信頼関係などがそうである。これらの地域は成功を収めている。それと反対に、労使の信頼関係を解体し、もっぱら労働コスト削減による競争力回復に賭けた地域は、弱体化している」。

では、リビエッツはどうやってエコロジに到達したのだろうか？ ラルザック闘争を通して鍛えられた彼は、しばらくの間、環境保護運動左派のいくつかの小集団に身を置いたあとで、やがて一九八八年に緑の党に加わることを決意する。「わたしが環境破壊に目覚めたのは、第三世界においてである。サンパウロの港であるクパタンを見なければならぬ。ぞっとするような破壊と略奪が存在している。大都市のすべての産業廃棄物が流れ込む入江のピロティの上に、スラムが建てられている。海の表面は石油の被膜で被われ、ときどき燃え上がっている。エコロジ危機が進行を早め、全般的なものになっている」。リビエッツにとってエコロジは、たんなる環境問題以上のものである。それは社会経済システムの全面的な再検討を要請する。「わたしは新しい労使妥協に賛成だが、それはもはや、賃労働者の購買力の増加にもとづく妥協ではありえない。新しい労使妥協は、天然資源の枯渇はもちろんのこと、ますます深刻化する温室効果や大気汚染を考慮する必要がある。当然のことながら、新しい労使妥協は自由時間の増加という視角から追求されねばならない」。

このような彼の足跡を念頭に置けば、経済学者であり、ヴァル・ド・マルヌ県の緑の党の候補者であるリビエツツがラディカルな変革を支持していることに、だれも驚かないだろう。「われわれが提案するのは、当時のテラー主義と同じように、ひとつの文化革命だ。だが、革命と言っても、国家権力の占拠を想像しないでほしい。人びとが得心して今までと別様に考えるようになるには、何年もかかるのだ」。それゆえ、緑の党の国民的綱領は、一步一步進んでいくことをめざしている。即座に労働時間を週三五時間に短縮することを掲げているが、低所得層を除けば、それにとまらぬ賃金補償はないのである。このような措置が生産費に及ぼす影響を緩和するために、企業の家賃手当金は所得税によって負担され、健康・保健手当金は付加価値税に転化される。年金拠出金だけが依然として労働所得と結びついている。価格体系にたいしては「ニュートラルな」システムを作れば、雇用の創出が、それゆえ、新しい拠出金の調達が可能になると考えられている。

リビエツツに特徴的なもうひとつの考えは、世界化した経済空間と閉鎖的な政治空間とのますます拡大しつつあるギャップを縮小させることである。「われわれはもはや、政治的意思決定をナショナルなレベルでおこないつつ、経済の世界化をこれからも押し進めていくことはできない。対応策としては、一方では、スーパー国家を建設し、政治的空間を拡大することが考えられる。言うまでもなく、このスーパー国家は真に民主主義的でなければならず、一九九二年一二月にマーストリヒトで開催されたEC首脳会議のインチキナ合意（欧州連合条約）とはまったく性格を異にしている。他方では、資本主義の空間的拡大を制限することが考えられる。これにたいしては、"それでは、アルパニアと同じ閉鎖経済志向じゃないか、開放経済がそんなに恐いのか"、という非難がわた

しに聞こえる。だが、われわれは決してひとりよがりの自給自足主義者ではない。ECが日本と同じぐらい開放されるならば、それでまったく十分なのである。市場の過度な国際化を抑制する輸出奨励金の廃止や世界化した経済循環の地域化などは、やろうと思えば騒がなくてもできるのだ」とリビエッツは断言する。

以上のように、アラン・リビエッツは資本主義批判から政治的エコロジーに移った。彼は今日、「緑の党」の経済問題の専門家として、自由時間の増加にもとづく新しい労使妥協を提案する。自由時間の増加にもとづく成長体制だけが生態系の持続可能性と両立するからである。

(若森章孝訳)

(Sophie Cherardi, L'itinéraire d'un économiste

(vert), *Le Monde*, 22-23 mars 1992.)

レギュレーション理論の新展開——エコロジーと資本主義の将来◆目次◆

目次

序文	iii
「緑」の経済学者リビエッツの足跡 〈聞き手〉S・ゲラルディー	ix
目次	xv
<hr/>	
1 エコロジーとレギュラシオン理論	3
1 エコロジー——それは新しい経済革命だ	3
社会主義からエコロジーへ	4
もうひとつの働き方	7
自由時間革命	9
税制改革のために	12
尺度を変えてみよう	14
2 エコロジー民主主義宣言 〈対談〉アラン・リビエッツ／勝俣誠	17
中東湾岸危機は富の再分配問題を提起した	21
将来の世代の権利を奪わない形の消費を	24

3 フランスのエコロジー運動 〈聞き手〉須藤修・小沢弘信・中村陽一 29

出発点としての「五月」……………30

ラルザックとフェミニズムから学んだこと……………32

フランスにおける運動の停滞と西ドイツでの成功……………33

フランス「緑」の急成長……………37

フランスのエネルギー政策……………39

エコロジーの意味の拡大を……………41

社会運動と知識人と政党……………42

日本をどう評価するか……………44

社会民主主義と「緑」……………49

4 フランスのアマゾン神話 51

一九八〇年代における環境保護運動の奇妙な停滞……………53

一九八八年の転換……………58

アマゾン神話の限界……………62

結 論……………66

5 南北環境戦争と地球サミット 69

セリフと配役……………70

善人役のヨーロッパと日本……………72

環境破壊の罪は南北双方にあるのだろうか……	73
ハドゥドック船長症候群……	75
南にとっての開発とは……	77
6 リオへの道——地球環境危機に挑むNGO	81
解説……	82
外交交渉を動かす国際市民社会	
——地球サミットのための世界NGO会議……	85
生産至上主義とは異なる方向を選んだ世界NGO会議……	86
世界NGO会議の準備過程におけるさまざまな葛藤……	88
世界NGO会議の成果——アジェンダ・ヤ・ワナンチ……	91
(1)予備資料の二つのテキスト	92
(2)世界NGO会議の雰囲気	94
(3)「一九九〇年代の行動計画」の精神	98
結びにかえて——国際市民社会が地球を守る……	101
7 地球環境問題と国際民主主義	105
エコロジーと社会関係……	106
エコロジー的矛盾の調整……	109
参加型エコ民主主義をめざして……	115

II、レギュラシオン理論の方法

8 レギュラシオン理論の枠組み 121

一九六八年の地平……………122

構造主義とマルクス主義……………123

アルチュセールの提起した問題……………124

構造主義を乗り越える……………126

レギュラシオン・アプローチの生成……………127

統一と闘争……………128

闘争が統一を生み出す……………129

再生産と偏差……………131

大危機からの脱出……………132

ヘゲモニー・ブロック……………135

ソシエタル・パラダイム……………136

9 レギュラシオン理論とマルクス主義 〈聞き手〉若森章孝・井上泰夫 141

影響力低下の原因……………144

歴史の必然性と自由……………146

学派内部での論争……………149

自律・連帯・エコロジー……………152

勤労者民主制の評価……………155

10 新しいテクノロジーとレギュレーション様式 159

一、フォードイズムとその危機……………161

(1) 技術的パラダイム 162

(2) 蓄積体制 165

(3) レギュレーション様式 166

a 賃労働関係 b 大企業のヘゲモニー c 「挿入」国家

(4) フォードイズムの危機——要約 169

二、労働過程と賃労働関係の再編……………170

(1) 技術革命の本性と可能性 170

a 各ワークステーションにおけるイノベーション b ワークステーション間のイノベーション c 諸種の限界

(2) 労働編成の三類型 173

(3) 労働過程と労働契約のフレキシビリティ 176

(4) 小括 181

三、新しいテクノロジーと産業組織……………183

(1) 「専門化企業」に向かって……………185

……………183

(2) 垂直的準統合 187

四、空間視角からの試論…………… 189

(1) ネオ・テラー主義の道 190

(2) カリフォルニア的道 192

(3) サターンの道 193

五、結 び…………… 194

Ⅲ、資本主義の将来

11 資本・労働関係の将来 201

12 二極分化するヨーロッパ 225

一、フォーディズムの危機のEC諸国への影響…………… 227

(1) 危機の二重の原因 227

(2) EC——停滞をつづける世界の二極 231

二、「供給危機」の二つの脱出路…………… 236

(1) 「ポスト・フォーディズム」——交渉にもとづく参加か、

賃金・雇用のフレキシビリティか 237

(2) 「守りのフレキシビリティ」と「攻めのフレキシビリティ」 243

a 守りの選択 b 攻めの選択

三、市場統合のマクロ経済……………248

(1) 状況の定型化……………248

(2) われわれは、どこまで進んでいるのか……………251

(3) 単一議定書により、未来はどうなるか……………253

(4) 対案は可能か……………254

結 論……………256

13 ソ連・東欧のゆくえと新しいタイプの南北問題 〈聞き手〉若森章孝・井上泰夫……………259

一、崩壊したソ連・東欧経済のレギュラシオン様式……………261

二、ポスト革命後のソ連・東欧経済のゆくえ……………263

解体後の問題点……………263

ソ連邦は存続しうるか……………265

社会的妥協の根拠……………266

今後のシナリオ……………268

三、EC統合の新たな問題……………269

ドイツ統一とEC……………272

四、ECの二極化……………273

五、緑の党と第三世界……………275

14 ポスト・フォーダイズムの展望……………279

一、発展モデルとはたんなる技術的パラダイムではない……………	283
二、資本・労働関係にかんしてすくなくとも二つの説がある……………	290
三、依然として岐路にある産業編成……………	295
四、マクロ経済は依然として重要だが、 ……エコロジーもしだいに重要になりつつある……………	300
五、アフター・フォードイズム時代の中心—周辺関係の構図……………	305
結 論……………	308
訳者解説—レギュラシオン理論と二一世紀……………	315
編訳者あとがき……………	328
参考文献……………	